

大杉栄の思い出

一

大杉の、ある極めて小さな、表面的な一部分を語るにすぎないというのを、あらかじめ御了解の上聞いていただきたいと思えます。ちゃんと調べて年代的に話せば、まだ理解が容易であろうと思えますが、そういう暇ありませんし、ぶっつけ本番で出まかせに思い付くままに話しますので、前後矛盾したりするところがあるかと思えます。

ご承知のように大杉君は大正十二年九月の震災の時に殺された。甘粕某という憲兵に殺されたことになっている。ところが恐らくその翌年に私が池田藤四郎という人から別の解釈を聞いたことがある。この事は書きもしましたが、この池田という人は運動とは何の関係もない。しかし大杉とも非常に懇意であり、私とも非常に懇意であって堺先生なども非常に懇意でしたが、この人の甥が麻布三連隊の中尉か何かだった。私がふとしたときにこの人という話をした



荒畑寒村

ついでに「大杉はあれは甘粕に殺されたのではないよ、あれは麻布三連隊で将校に銃殺されたのだ」と云った。「そんなこと云ったって甘粕が大杉を殺したと自分で云っているじゃありませんか」「いやア、それは甘粕がひっかぶっているのだ。現に僕の甥が営庭で士官が大杉を取囲んで拳銃で殺したと云っているんだ。甘粕は軍部のやった事を引被ってるんだ」こういうんです。池田という人は、そういう事を自分で想像して云う筈はない。ことに今日と違って当時軍部の信用を傷つけるようなことを云ったことが知れば大変な責任になり、池田さんがそんな事を云う筈がない。それに甘粕が法廷で比較的軽い判決を受けて、それから僅かしてフランスへ遊びに行った。何でも非常に贅沢な生活をしていたということだ。帰って来て最後は満州国の高官になって飛ぶ鳥を落すような威勢をふるったということを聞いております。そんな事を考えると何か軍部が甘粕に罪を

背負わしたという義理立てに、そんな位置を与えたとも考えられる。だから私には、池田さんの話されたことがまんざらでたらめではないと思えるのです。然しそのとき考えてみれば、池田さんの話によると麻布三連隊の営庭で士官が拳銃で射殺したという、一方では甘粕が柔道の手で縊り殺したという。扼殺か銃殺かは死体を見れば直ぐわかる。銃殺ならば弾痕があるから直ぐわかる。そこで死体を引取って来た人達、安成二郎君、それから服部浜次君、古い方はよくご存知ですが、彼は私等と一緒に横浜ではじめて平民結社という社会主義地方団体を作った洋服商、この男も一緒に大杉の死体を引取って来た。そこで服部に、もちろん服部は池田さんを非常によく知っていたのですが、池田さんがこういう話をしたのだが、一体本当かどうか、死体を引取って来た君に聞けば解ると思うが、扼殺されたものが銃殺されたものか一体どっちだ。すると彼はそんな事いって君わかるものじゃアないよ。大小三つの棺を引渡されて、大杉と妻君と甥の死体だといって引渡された。もう棺に入ってしまったが、腐乱していたので、石灰がつめてあり全くわかりはしない。本當の事を云えば実際に大杉が入っているのか妻君が入っているのか甥が入っているのかさえもわかりはしない。誰か他のいい加減な死体をつめて、これがそうだと云って引渡されたのかも知れないんだ、と云う話なんです。

ですから、大杉の最期につきましては、二つの説がありまして、どちらが本當か実はわかっていないのです。わかっているのは、麻布三連隊に於てであるにしろ、甘粕某によつてであるにしろ、日本の軍部が大杉と妻君とまだがんぜない甥を殺したという事は明白なのであります。私は、どちらかといえば麻布三連隊で殺したという

のが本當ではないかと思うのです。で甘粕にひつかぶらせ、後で甘粕に好遇を与えて労をねぎらったというようなことがありそうではないかと思うのです。

ただ私は池田さんの説にただ一つそんなことはないと思うことがある。それは、池田さんの話にいいよ銃殺に入る時に、大杉が営庭に膝をついて士官の服に手をかけて許してくれと云ったというのです。これは私がこの説に全幅の信頼を置きかねる所以なんです。大杉という男は大杉だつて人間ですから我々と同様に殺されると云われた時に、きっと怖えたに違いありません。牢に入ることは矢張り我々と同様に苦しかったに違いありません。けれどもそういう僕等と異なるところは、おっかないと云つて、へこたれてしまわないのです。僕等ならば麻布三連隊に引張り出されて士官に取囲まれ「さあ貴様」とピストルを突付けられれば「どうぞお許し下さい」と云うかも知れないし、云わないかも知れない。これがしかし大杉なら、おっかないと思うに違いないけれども「やるならやれ」と云う男なんです。それがまあ、大杉と長い間つき合つて大杉の行動をみてみるとそういうことが云えるのです。ですから私はその時膝をつき服に手をかけて助けてくれと云つたということは私にはまだ本當だと思えない点なのです。しかし大杉が自分の命は別に惜しくはないけれども、妻君や未だ何も知らない、がんぜない甥の命は助けてくれと云つたかも知れない。そのことは人間としてあり得ると思う。それでどうにもならないと知つたならば、大杉は妻君と甥を自分の後に庇つて「さあ射つたら射つて俺を殺せ」と云つたに違いないなどと想像しているのです。それだからこの説に私は全幅の信頼が置けないのです。

二

大杉は、今いましたように我々と同じ弱点を持つてましたけれども普通ならばへこたれてしまふところを、自分で自分のへこたれる心を押付けて、何くそと云つて立上る。俗な言葉でいえば、片意地といひますか意地張りといひますか、そういう大杉の大きな特性といふか性質は、これはお母さんの影響が非常に強いと思うのです。

大杉のお父さんというのは、ご承知のように軍人で少佐か中佐で退役した人で、日露戦役のときは何軍でしたか師団副官をしていて、コッコウ台の戦では殊勲をたてた人だそうで、根っからの軍人で、大杉がはじめて明治三十九年の一月でしたか二月でしたか東京の電車会社の値上反対運動の時、その連中が兇徒囂衆罪で入獄した時、これは大杉が刑事事件に関係した最初でしたが、その時お父さんが未決監を訪ねて、面会に来た。そして顔を見るなり「汝は」と云つた。大杉は、どうも僕だつて文章で書く時は汝はという表現も使うが、日常の言葉で汝はと云われたのは初めてだ、といって苦笑していました。が、それくらい軍人生活が性に付いていた人なんです。

お母さんという人は、大杉は容貌もお父さんよりはむしろお母さんに似ており、あの目の大きいところなんかはお母さんそっくりでした。大杉が子供の頃、大杉が悪戯をする「はうきを持つて来い」と云うんだそうです。大杉がはうきを持つて行くと「持つてくれば打たれるのに何んだつて持つてくるんだ」といって打つたという気性なんです。大杉だつて持つてゆけば打たれることは知っているん

だけれども持つて行く。お母さんも「何故持つて来た」と云つて苦笑して止めちまわらないで「何んだつて持つて来た」といって尻を打つたというような気性が、遺伝という程のものがどうか知らないけれども非常に強く影響されていると私は思うのです。

それが大杉の一つの性格で、良い面にも悪い面にもよく表われていました。例えば、あの有名な恋愛問題にしましても大杉はあれを何か性の拡充とか、自我の発展だとかいろんな理屈をくつつけている。私はそんなものが恋愛に関係あると思つていませんが、げんに自伝の中にも、「近代思想」「月刊平民」を出す毎号発売禁止をかう。「労働運動」を出しても毎号発売禁止、やることなすこと皆つぶされてしまふ。あの当時の官権のやり方も皮肉で、あの時大杉と僕と、こう毎号々々発売禁止では、此方でも発売禁止だろうと思ひますから、むこうの裏をかくて新聞を持ち出し隠しという尾行をまいてそれを撤くというようなことをやる。終にはこつちが印刷所から刷上つた新聞を持出し尾行をまいて撤くというのと、警察が又こつちを出し抜いておさえるというのが、いたちごっこになつてしまつたような状態で、大杉と私は、今度はやられるぞ、今度こそ行政処分だけではすまない。今度は長い短いかわからないが引つ張られる準備などをしてたんですが、ちつとも引張らない。起訴もしない。けれどもこつちが手も足も出ないように皮肉な弾圧を加えるんです。ですからそのうちに金はなくなくなる。くたびれはする、終りには警察が新聞が未だ刷上つていないのに印刷所に乗込んで来て目前で解版させる。もう全くどうにもしようがなくなつて来た。運動も順調に進んでいれば同志の結束も保たれ、面白いですからね、志気も揚るのですが、そう出たとこ勝負でやられては何んとい

つたて終りには疲れてしまします。それで内部にはいろんな不平も起る、嫌気もさすというので力が抜けて行く。そこで大杉なぞは敵に対する憤慨ばかりだけではなく味方に対する憤慨も起って、大杉の自伝に書いてある言葉によれば「半ば自暴自棄に陥っていた」。

三

そんな時に恋愛問題が起った。私は此の言葉が大杉の恋愛問題に闡明する心理過程をスポット・ライトのように思うのです。

ですからやることなすこと行詰りで、いわゆる半分自暴自棄に陥った。そんな時に大杉の一人倍旺盛なエネルギーが傍にそれたのが、恋愛問題に発展した。いろんな理屈は後から付けたもので、いくら大杉だとして自由恋愛でもって革命が起るとは思ってたでしろう。それから自分がそれ程思ってもいないのだけれども、ことさらに奇矯な詭弁を弄し奇をおどかすという点もあった。

宮島資夫君の遺著に「遍歴」という小説体の自伝がありますがその中に、あの夫婦は神近君とも伊藤野枝君とも懇意でしたが、大杉が自分の所に来て恋愛などは排泄作用と同じだと云っていたと書いている。当時の新聞などは恋愛問題が起ると大杉はサーニン主義だと書いた新聞もある。サーニン主義とは、ロシアのアルティ・パールの書いた小説で、道徳だとか社会の習慣だとかは一切無視して自分の思い通りにやるという人物を描いたものです。大杉をサーニン主義だとは思わなかったろう。良く詭弁を弄することがあったのですが、まさか恋愛を排泄作用と同じだとは実際に思っていないかつたでしょう。

荒川義英といって若くて死んだ小説のうまい青年がいましたが、荒川と大杉と私の三人で上野から谷中の墓地あたりを散歩したことがありました。どこでしたか、或る家の門を通りかかって、ひよっとみると、もうとうに亡くなった日本画家の尾竹波画伯の表札のそれに並んで尾竹紅吉の表札がある。現在の富山一枝夫人で、例の「青踏」の同人だった。大杉が尾竹紅吉の家がある、ひとつ訪ねてみようじゃないか。しかし紅吉女史とは誰も知らない。何しろ臆面なしですから、天下に有名な大杉栄先生の御来訪だということで、紅吉女史早速画室に通じた。紅吉女史はさかんに竹の子の絵を描いている最中でした。紅吉女史は書くことは非常に勇ましいのだが、常にもじもじして非常に内気な人でした。何か話をしているうちに大杉が「腹が減った。すみませんが何か御馳走してくれませんか」と云うと、ようござんすとか何か井を頼んでくれて、それをありがたく頂戴してから、大杉が紅吉女史に「あなたは見ず知らずの男が三人訪ねて来て腹が減っていると云えばこうして御馳走して食慾をみたしてくれる。若し私が性慾に餓えているといったら一体何を御馳走してくれる」紅吉女史真赤になって「そんなこと……」といったもじもじしている。「そんなことと云ったって、食慾と性慾と同じではないか。生理的にどう違うのだ。あなたは食慾に餓えているといえど御馳走してくれる、性慾に餓えているといえど、どう御馳走してくれる。理論的にいってどこが違うのだ」尾竹紅吉先生もう弱っちまっている。こういうふうな悪戯を、はじめての婦人に対しても平気でやる男なんです。だから何か大杉というとかに礼儀も何も知らない無茶なおっかない人間だという迷信が生じた。さっき云った池田さんが僕に「大杉がどうして女にもてるかという秘決を知っ

たよ」といった。「大杉という世間ではどんなおっかない人間かと思っている。ことに女なんかそう思っている。そのおっかないと思われる大杉の女に対する態度を見給え、にこっとして、実に愛想が良くってね、あれで君まいるのだよ」といった馬鹿なことをいいます。そういう自分が今いった宮島君がいったことにしろ、尾竹紅吉女史にいったことにしろ、本当に大杉の腹から出たことばでないことは明白で、若し誰かがそれではあなたの食慾を満足させたと同様に性慾も満足させてあげますと云えば、きつと頭を抱えて逃げ出すかも知れないですが、僕だったらはじめの婦人に対してこつちが恥かしくなってしまうようなばかなことを平気で云う一面があつたのです。

ですから後に大杉のまあエビゴネンといいますが、亜流のアナキストの間に一時ちよつと悪い風潮があつた。カフェーで革命歌を歌い、そして巡査に引つ張って行かれて一晩拘留でも喰うと何か革命的気分を味わつたつもりでいる。真面目な労働組合運動なんかに対して、あんなことは改良主義的なことで革命にはかえって妨害であると云つたり、革命というものを非常に抽象的に考えて単なる気分酔う風潮があつたことがある。私は、大阪に大杉が訪ねて来て、ある人に大杉と一緒に馳走になった時その話をして、君の教育の仕方が悪いのだと云えば、大杉は前から本能主義ということ云って、人間は本能に従つて何でもやらなくてはいいかんと云つていた。それを皮相的に理解した結果という点もあつたと思うのですが「勉強しなければいかんと云えば本の虫になりやがるし、それではいかんから本能に従つて何でも好きなことをやれと云えば、そういうふうになりやがって、いやはや親の心、子知らずで困つたことだ

よ」といって嗟嘆したことがあつた。まあどちらが大杉の本心かは知りませんが、大杉に嗟嘆する一面があつたということは事実で、本能主義が良いからといって、時処を弁えずに、何でも理論もへつたくれもない唯本能の命ずるままにやれば良いんだというのは決して大杉の全貌ではないのであつて一面にすぎない。何でも余り理論、理論といっているのに対して一つの反抗であつたとも考えられるのです。恋愛問題、恋愛観にしても世論的な traditional な conventional な恋愛観に対する反発がああいう理論を恋愛に付けたとも感じられる。

四

大杉という人は外観的には非常に大ざっぱな人間にも考えられるが、非常に緻密な男であつて僕等とはとても及びがつかない。

手先の器用さということも多分にあります。「一緒に千葉監獄に入つておりました時に、私どもは下駄の横鼻緒を縫うという仕事を一緒にやっていたが、大杉が一番仕事が上手で、それから仕事が一番早い。大杉の仕事を、事業士といって請負っている人間があるので。結襟服なんかを着て高利貸の手代みたいな奴が皆に仕事を教えるんですが、そいつが大杉のやつているのを持って来て、「大杉の仕事はこう上手なんだ。今度囚人の仕事の展覧会に出品する」といって見せる。実にうまい。横鼻緒を縫つて十足ずつ一束にして、それを十足大きくゆわえて縫つていって終りにちよつと縋をもどすと横鼻緒がふつくとふくらんです。それがさーと並んだから実にきれいなんです。それが良く縫つてあるから光っている。一番下

手なのは堺先生で、堺さんの一番遅くて下手だった。大杉はそういう器用な才をもっていた。雑誌の編集なんかにしても大杉のやつた「近代思想」の紙面が実にしまっているんです。ちゃんとびしっと入っている。僕等がするようにみだしたりなんかして後は何頁に続くなんてみっともないことはやらないんだ。空いている所に入るカットなんかにしてもちゃんと入って実にうまい。大杉が何か体を悪くした時、僕に代ってやってくれと云われたんだが実にだらしがない。「これはもうやりきれない」というと「僕なんかそのやりきれない事を毎号やっているんだ」というような厭味を云われたがそういう点も手先が器用だけでは出来ない。要するに彼は頭が緻密だったんです。私はこういう才は、大杉の語学的才とどこか結び付いていると思うのです。

ご承知のように大杉は幼年学校時代からずっとフランス語をやつて来た。幼年学校を退学してから外国語学校に入つて今度は本式にフランス語を学んだ。その外国語学校時代に日露戦役当時の平民社に出入りしていて私どもとも知り合つたのですが、大杉はいつも金ボタンの外国語学校の制服でブラシをかけて塵一つとどめていないようなスマートな格好で、頭も相変らずひゅと油で固めていた。平民社では彼のことを「大ハイ」「大ハイ」といつていた。僕ははじめ「大ハイ」って何んだらうと思つていたんですが大杉ハイカラの略称なんですね。皆で「大ハイ」「大ハイ」といつていたくらいハイカラだったんです。ですからフランス語は一番得意であつたしまかつた。それから英語も非常によく出来た。フランス語と英語が一番良く出来たがドイツ語も書けるし、ロシア語なんかもトルストイの小説なんぞを読んでた。終りには、イタリア語をかじつたし、

エスペラントは、もう明治三十九年に黒板勝美博士と一緒にエスペラント学校を作つて自分が先生になつていたくらいですから日本では最初のエスペラントリストでした。今度は入獄したらスペイン語をやるんだと云つていましたが、よく冗談に一度監獄に入る度に一外国語を覚えてくるんだといつていたくらいです。勉強するんでしょが、語学に対して天才的な頭をもっていました。そういうところと、雑誌なんか作つても編集が非常にうまい。下駄の横鼻緒を作らせれば非常に上手い。これらはどこか頭の中に共通点があつてそれから四方に出てくる才能ではないかという気がするんです。

五

私は大杉とは長い間つき合つた、近藤憲二君、和田久太郎君等も大杉と一緒につき合つたし、今日みえている安谷君も大杉を良く知つておられるが、おそらく大杉が涙をこぼしたのを見たのは僕だけだと思ふ。

これは、明治四十一年の赤旗事件と一緒に捕り神田の錦町署へぶち込まれた時、僕と大杉君があまり暴れたものだから監房から引きずり出されて裸にされ引き廻されて蹴る、踏まれる、さんざんな目にあつて私はとうとう絶息したが、その時、大杉はくやしがつて涙をぼろぼろこぼした。おそらく大杉が人に涙をみられたのはこの時だけではないかと思うのです。彼くらい我慢強く僕ならすぐ泣くような時でも、大杉だつて悲しかったらうし苦しつたに違ひなかつたでしょうが、歯を喰ひしほつてでも泣かぬという非常に強い性格を持つていたと思うのです。何しろあの位強烈な個性を私はま

だ見たことがない。大杉のアナーキズムはあの強烈な個性に基いていると思うのです。

震災直後、私は日本に帰つて来ましたが、すぐ女房に会つて聞いたところ、大杉が殺される前日、どの子かわかりませんが小さい子供を乳母車に入れて押しながら私の家を訪ねて来て、私の家内とも非常に懇意でしたが「お玉さん」お玉さん、というのは私の前の家内の名前ですが「お玉さん、寒村がいなくても心配することはないですよ。僕等がついてますからね、安心してなさいよ」と云つて帰つていった。その翌日ああいう最後を遂げたわけです。その時の事を女房が涙ながらに話してましたが、この時の大杉は私の家内なにかに話すのですから、どうせ深いことを話した気遣いはないんです。が「フランスで非常に親身になつて世話をしてくれたのはやはりフランスの共産党だった。フランスの無政府党なんていうのは先ずだめだ」といったいうことを云つておつた。私は大杉が長く生きていたら大杉の思想に一つの転機が来やアしなかつたかと思つたりもする。来なかつたかも知れない。それを聞いたときにそんな気がしました。

大杉がソヴェット・ロシアなんかに対して非常に最後まで反対の意見を持ち批難をしていた。というのは要するに強権というものの、どういう形であるにしろオソリティーというものに反対していた。労働者の政府だろうがブルジョアジーの政府だろうが政府というものに反対する。だから大体私は非常に抽象的だと思うのですが、しかし大杉の信念はそうなんです。非常に固い信念になつてた。その信念は大杉の強い個性で、従つてそのアナーキズムに対する非常に強い信念から来ていたと思うのです。ですから大杉の見通しに非

常な誤りがあつたなんていうことは不思議でも何でもないことで、これは又大杉の評価を低める所以でも何でもないと思うのです。例えばイタリアの大正九年か十年の初めミラノ市の金属労働者が工場からその経営者を放逐してしまつて工場を自分達の手で管理し生産したという有名な工場占領事件というのが起りましたが、これはサンジカリスト革命のテストケースなどと云われて私なども初めから非常に興味を持ってどういう発展をするかと思つていましたが、大杉も非常に興味をもつていたようです。現に或る会合で「革命というものはこうなくてはいかん。ロシアみたいに労働者が政権を握ることが決して革命ではないんだ。革命は労働者が資本家を追い出して生産の権力を自分の手に握ることが革命なんだ」というふうにいふてましたが、イタリアの工場占領事件はその後あつてなく潰れてしまつて、社会革命というものはサンジカリスト流ではだめで、やはり社会主義的な理論なり、方法なりでなければだめだということが立証されたと思ふのですが、そういうことだつてあり得るんです。それは大杉の人物を評価する基準にはならないと思ひます。

六

「近代思想」を止めてから「月刊平民新聞」がつぶれ、月刊「近代思想」にかえて来た。このころ大杉の思想はますますアナーキズムに傾き、私は労働運動の方へ考えがゆき、労働運動と社会主義の合致といえますか、そういうことを考えておりました。

私は大杉の最初の恋愛には同情を持つていました。それというのは最初の堀保子さんとの夫婦生活はかならずしも大杉が満足してい

なかった。それは経済的にもうまく行かなかったし、これは生理的にもうまく行かなかったらしいんです。殺された大杉の甥のお母さんは「あやめ」といって大杉の一番下の妹だった。あの人にお父さんの扶助料が来ていたが、一時は大久保で「近代思想」を出していた時分には他に収入がないんですから、どの位もらっていたか知らないが、その扶助料で食っていたようなものでした。だけど保子さんがあやめさんに辛く当たる。僕の女房が憤慨して、僕の女房は正義派でそういうことはおかまいなしだから、大杉にあやめさんのことであつてかかったことがしばしばあった。大杉もそれには実に手を焼いた。又あやめさんという人が実に惻口で、アメリカに行つてましたが、帰つて来て僕の女房を「おばさん」「おばさん」といつてまじだ、僕のワイフが「あやめさん、貴女は保子さんにはずいぶんひどい目に会いましたね」と云つたら、普通のものだったら「本当にあの時分は」なんて云うものなんです、それがそんなことをおくびにも出さず、僕の女房のいった言葉をはずしてしまつて他の話をした。あの子は実に惻口な子だと僕のワイフは褒めてました。僕は隣りに住んでいるんですから、そういうことを見聞しているし、ああいうことになつても神近君とは無理もないと思うのです。そうしたら今度は伊藤君でしょう。これもまた無理もないんだそうです。これはずつと順調に続いて子供も出来ている。

保子さんと大杉と一緒にいる前から僕は知っているが、保子さんは勝気な人でしたが、大杉が保子さんに「俺は決してお前を棄てたんでもなければ、お前が嫌いになつたんでもないんだ、同じように神近もお前も思っているんだから、しばらく目をつぶつて我慢していてくれ」と云つたのに対し保子さんは「あたしはそんな関係は我慢出来ません」といったというんです。保子さんが「ああ云つてくれ」、「こう云つてくれ」と云うんで、僕もやむをえないから大杉に保子さんがこう云っているよ、ああ云っているよ、何とかしてやつたらいいじゃあないかと仲をつぐ、そんなことが大杉と別れる原因にもなりました。

甲羅無

「アナキズム」という名を初めて知ったのは、確か児童小説の中であつたと記憶している。黒のフロックコートにぎんばら髪の黒髪、ぎらつく目で爆弾を抱えた絵姿が、不気味な翳を心に宿した。

本誌の取材にあつて大杉栄の近親の方を紹介された。しかし、種々の事情により、この企画は残念ながら断念を余儀なくされた。一つの戸惑いが濃んでいる。それは、あの「狂徒」の意匠が今もなお、我々の深部に暗い鐘を垂れているという事実の現前性に対してである。観念の世界からは見えようもない、それは「生活」者の現実であつた。

北一輝と供に、日本における数少ない土着型革命者であり、虐殺された大杉にしてそうなのである。大逆事件によつて死を強いられた幸徳秋水は未だその生地、高知において不当に黙殺されつつけているし、アナキストではなかったが難波大助もまた歴史の彼岸に

追いやられてきた。けつして歴史的過去の事象ではない。連赤「事件」において加えられた弾圧の質は、虎の門事件のそれによつて用意されていた。それは、とりもなおさず日本史が、幾多の史的変革をも越えて固守してきたもの、天皇制・共同体の黒く湿つた「影」を黙示する。

アナキズムのロゴスには殆ど興味を持ち得ない。問題なのは、そのパトスであり、それらの在りようである。

「僕は精神が好きだ。しかしその精神が理論化されるとたいがい嫌になる」(大杉栄)

桁間に不断に込み出ていく何ものか、活字と活字との間の無限の白い宇宙空間、そこにこそアナキズムは、そしてその「魂」は息づいてきた。

それ故に、自由に憑かれ、国家に自らを叩きつけ、大正という時代を疾駆して消えたアナキストの群れ、彼等を後づける作業が秋山清氏や大沢正道氏等のごく限られたアナキストプロパーによつてしか担れてこなかったことは、日本における革命、思想史の不幸であつた。

「アナキストと称さなくとも、自由を渴

するものはみなアナキズムの理想をそれぞれのかたちで持っている」(塩谷雄高)

アナキズムが「思想の博物館」に閉居されて久しい。六十八年〜七十年における全共闘運動の過程で理念としてのアナキズムの蘇生が謳われた。だが、単にアナキストプロパーのこののみならず、「国家」そのものの「死滅」あるいは「廃絶」のその日まで、如何なる革命者もまたアナキズムとの、そしてその「魂」との格闘は回避しえないはずである。

月あの夏の光と影は

どこへ行つてしまつた――

「八月の濡れた砂」

虚空に打ち上げられた「国家」と「階級社会」の「消滅」というイマジユの光輝を幻視し、そして深く暗い、闇夜に沈んでいったアナキストの群れは、何処へ行つてしまつたのだらうか。恐らく、それ程遠くにはなかったはずだと、私は思うのだが。

(杉浦勢之)